

Bookレビュー

協力 奈良県立図書情報館

ダムと民の五十年抗争 紀ノ川源流村取材記

浅野詠子 著

風媒社、2017年8月、1800円(税別)

奈良県内の山間部でも川上村は財政が豊かだと聞いたことがある。大滝ダムが造られたからだ、という。なるほどと思った。本書が取り上げているように、開発に伴う様々な補助金があるためである。

著者は、関係者を丹念に取材することを通して、大滝ダムをめぐる動向を追っていく。書名にある五十年とは1959年の伊勢湾台風を期に計画が持ち上がり、2013年3月に竣工祝賀会が開かれるまでの歳月を指す。当初は激しい反対運動があったというが、そうした時代には多くを触れていない。それもそのはずで当時の関係者の多くは既に鬼籍に入っており、取材対象の多くはダムを受け入れることを選んだ人たちである。しかし、2004年の試験耐水を機に白屋地区に大規模地すべりが起こり、責任を認めない国との間で裁判になる等、ダムをめぐる争いは続いたという。

緊急放流による事故、移転や補償をめぐる人間関係の破壊、生態系のかく乱等、著者はダム建設が引き起こした問題を数えあげる。大滝ダムのすぐ上流に位置し、一般的には農業用水不足に苦しむ県民多年の悲願の達成といった形容がされる大迫ダムおおさこについても、ため池や地下水の活用等他に方法がなかったのか、と問いかけている。また、ダム事業自体が自己目的化しているきらいがあるのでは、と春日山原生林に造られた岩井ダム等を例に疑問を呈している。

「真の文明は川を荒らさず、村を破らず、人を殺さず」。約百年前、鉱害地を遊水地化して行った治水事業に、身を挺して反対していた田中正造の言葉である。百年前の治水事業の評価をめぐる検討は今も続いている。技術は進んでも、文明はどこまで「真」に近づいたのであろうか考えさせられた。

(佐藤明俊)

